国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

花廼志満台 四編 中

208
12
694

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

比翼連理花廼志満台第三編巻之中

東都　松亭金水編次

第十五回

琴さん、落とりの名を名の名。落花とりの名を名の名。墓参員社
さく。徒ありて冥加あらせるなり。コロリンシタン
サア　まま人の変事を聞く。アヽ大変を遂くること
遇屈〳〵。チット落ちを拾あまりこと
と来るんざろう。アノ先刻来まりこと。私しもアノ利ごよ琴

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

とゝ語く。春さんゞゝ。久しく少輩の侍よ。春さッけゞ。師さんハ
何処へ行くといゝゝ。アイ　今ハ知りませゝ。何処へ行きます
ゝゝありませんと。主ゝきりで。お稽古さんゞゝ。豊後
でも主ゝ稽古で。主ゝ。やく。行きまゝ。お稽ゝまゝ。大
ゝ。ゝゝゞも春ゝゞゝ。滅ふうゝ。人ッちゃアわ。十二
人衆。今を主ひゝく。亟ゝきゝゝ。眠が出ッ。自己が知ッ
ゞゞやアわゝ。勿論ゝゝ。自己ゆも茅ゞの上ゞゞの
と。笑ゝゝ主ゝ。主ゝ。ものゝけまゞ。ゝゝ当りゝゞ

ゝん。ゞゝ。ゞゞゞ。呂。ゞ。我ゝ。ゞゞ。ゞゞゞ。ゞゞゞ。ゞ

くあて。彼の所へ来たるなり。「ア
今帰りまして。お生へ先刻も来たるまたとそうだが。又お出か
何ぞ用でもあるのか。「はへ十二さしる用もありませぬ。久しく逢
あいたい〳〵。ぶらりくと出かけたのサ。此中も来ずに稽古がありて
居たが。今日まさに暇もしやと思つた。此頃はおのれおりたい
とゆうても出来ないて。番頭稽古やみ「るせへ。何も
おりしたいのは。形ばかりでも多く用がたつて出来ない
もまるのサ。あゝ。出せへまりやア。おりたいのへ。まゝあしい

と彼をさぐ。そしてまた彼を抱みつくでもあきやア
ないい〳〵。何彼仕ても冥しやア。あいへ。大分よ。お世話ごと
冷笑へば。法ちが。大抵の侍へまじめと居り「とまゝ。大
概は婚門て居るエ。お主も屈しきふ居る時ぶんみやア
時ぐるよ。主公つけく。さ形りへ。形りへ。形りへ。形の小学ば
歌いのといふまき。みやう。そまへくふ。稽古へやりまつも
あり。米の稽古〳〵。庶貧〳〵。一切自己が勝手なて。ふ
後は繋結よ出るエも止さしやアねへう。勿論退稽して

うゝ後へ何とかおもつても械がまへぐ。ゑめへの世話ふ
かつてさへも。みつとへいへめ。ゑなのあるを実へ中きうう
いへめ。ゑなのあるを実へ中きうう
嘶も出さ理。ぢやそれと貢ぐ。ゑもあるめへス
そまとの頃へ法ん〳〵しゝ。遊近まりやア悔へ向ぐ。出
て性ぐふ今新とへ。俗まりゑ義理ちうぐ。ゑんが世ぐも
そまとぐやア減めへ。ちへこ。ゑつファしゑとゑ式おそぐれへ。マアとく
ゑ様つゝくおうゑる。侍ふ分をこ垂ちやア。ちへと云みへゑうけれ
ど。私のやうゑりのぐも。彼見と云ておつまぐうゝ。へへをお

まつふ角式任せこゑるう。異イ家イふ手紙式かけ
廻つゝく。ゑまこゑッ臭へ。天ゑのの白ひを嗅ぐ。二十や四十の
殘をうて出ぢり。場ぐらうとゑへて。ゑまへの世
狂ふ。ゑいゝく長ゝ。今切なつゝゑんちやア。元の濟云
場へ弔殘。ゑゑのつく仕舞し。粋く法まゝゑの亜へ一文
ゑうで。ゑけ出ちやア。国ゑゝッイ。新へも出ゑうア。ゑゑ
ゑへぐ。ゑまへもまこゑへんで法まゝなくゑへとッたもの女の疲徳
ゑ出ゑうて。ゑゑこもゑへぐやアゑへうゑ。だゑへくしのさへ退

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694
ガラス使用

様をこって。おまへの様ふ様諸くふある人も。ないものぞねへ
働きより働きぞ。ないぞやアるのう。是ゝ。行様ゝして工夫でも
様なるッてう。おゝ。千様形容をして来くおんまでない。を
所の様ふ。ふ安ゲコろいわね。注「ヲこの女めハ。よく毒ゝくと
毒者ばゝ。成ゝ云なるなア。いゝハ来るみといのゝ来めへ
ホンニ。まめへの様ふ。欲ばりの。義理ゝ。ずをこそこのわへ
注「まゝ。おめへのゝ。ゝのふ。義理ゝ。なる様ばゝのゝ。手
竟些ぞア。少ばでも者へぞ。ふゝくと様様をこのく

ふ。なるンぞア。様の様へ人ふ義理ゝ。なるなア。尚時注りま
せん。注「ホンニ。不義ゝ。言まめぞるなア。あゝく毒者のつまこと女
ぞア。注「コンこゝ方でも毒者ばゝつ様ゝらゝが。ゝ方でも毒者ばゝつ
きゝョ。ゝく。おゝりゝく。注「ゆゝとゝいこゝねへでもゆゝゝへゝゝるの
注六。光刻より。おゝ言ゝ。雑ゝ。狗ふすえゝ様。様ゝゝ様ゝんと
おりへども。おゝつと。様へて。ゝ言ゝあゝると。側ふ安ゝ。様ゝ様ゝ一ゝが
ゝの。義ゝりて。様ゝ成。おゝへ。「マア。注六さん。ゝ。ぞゝいまを
ハゝ。姉ハ。ゝ。ゝのゝりゝ。義ゝ様ゝ。性質。さぞ。ゝ。ゝもあゝり

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694
ガラス使用

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

まゝさらうが。そもそも私が潜まりましたぞうど作り給ふ
すりて下さるまゝ　詞ナニ　私ら女ひとさんる。自己のひとと
遠つて。別りの身に教ろう。老婆成法さされるのも因果ふ
和。まゝ此処の定にかつく居て。世話ふるる気ハる。土地
アやけ。ちつ多ふ世へト　意犯ふ振きり知くゆけが路でお寅ハ
せうら第ひ　吉ハホンニ　智恵の浅人屋ら彦うどやアれハうハン
ちめへも無ぐて仕するゝのがあるあめう　詞それでもあん
まり寅のぎくぐゝサ　吉ハコ　そりやア人ふうけりサ。あんの

あんあ世ふ命ゼト　傍ら為先人ふ言りく　吉ハサクくおまへも
稽古ふ出るるせへ。私もまぐ仕ところがあるゝト　和く一せ
世ふそ五ツ。門ふ出て　演ゝて出ゆく。ぶのわどぞ法まゝ元
ふつふ　彩ハすふ　お吉ハどと法ハ。いと悔ひ人の嫁婦
ふまども。かゝる彩ひハ世間ふ多ゝ。人の委敷ふてる
とき。武士を矢まへ。性を知るふ稀るべゝ。近世
流行の男女のぐとき。ぐ金銭を沢るふあるまぐ
実情のあるべき。程るゝ。それふ潔まて身を顧りを

ざるれ。爲の毒ハぐ〜といのべきう。後神の戯作る
ぐ〜も。看官ゑを志ろう〜う〜
面摂採摂桑るぐ〜に。耳をはく〜わく接わこそ振りの
投擲の。川原絞一見の南ぢき。見なりのよき奚二階。細
見のあけ〜陸子さん。内やゆ〜〜き玉ノの。こゑやいづら
ちあっぎの。みすのちき立の鬼猪。掾のゆとりみすを又
わき。ゆ〜〜作向二階のう。物あんどるの体れ。をり
う〜二階で吹売とたく〜歩吹の寄トシく〜〜ちま

きんい方掾おいひごけまど。私いどうも承知さまま
せんい。あぜと云て出発るまの。元よりまさアノ小まさんに
そ〜わど物まく〜居て。女房ゑ仕ゑのいけりやアあうゑのと
いゑ義理がある〜ゑる〜。何も私成出掾ゑ迷いせゑい
が強〜ゆアあいうる。実と自あまさんが。是那方掾〜る
くッちゆア。ゑ〜ゑいといゑる〜。猪子ゑをるさい私
きやア猪金ノ性く。居ゑ心自ありまんどう〜てなの
娘と掃掾ゑゑ居て居らまるのう。方掾〜て池の

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694
ガラス使用

男と寝るのハ居く紙ハテ分らぬ様へとく云もんだあ
わへら。あめへあも仙合様へ。何も自己がおまへに惚て居る
ろう。初りの程ハ程ハ。今さらあまを捨てハちやア
どうも支へ切れ自殺までしよう。爺さんの為へ海ぢゃ。と云
て旦那を本妻にして。あめへを妾ふ仕やうといふと処が
人の妾側女よ。あるこれハ様へと云ぶらう。去程にて
と。何ぞ押分様へ程ぶろう。いつをのく寄屋の別れて
その子かいりあやア。自己がこれへ。偽物を作らに来るも。

あく様へやうに。あめへ成程身て中らうといふのぶろう
自己が仏根とも。没らけて。ふまけ様へとい
んぶ「アレサ去程縛成ほけておいひの成。私ぶで
ツ子のやうに。居ぶろへと。法情成いふのしやア為いがね
あるわど初めハ多成しく浮ろう。出来ぶ程ぶけま
ど。恨く泣くあるふ水つけちやア。あまへと思うけて仏様を
あるふもあり。まらもやア。郎も角も。先ぶ中ろう爺も様
知れく居て。代るもいつあやア。手めへの様人よ引きに

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

さまてく僥倖ぞ。あるうれど紙治さんとりふ人の。男ハ好今ハ
ありゝ。艶しくして直ぐ。そしてく茶くるめくく性をとろて
あんあ弱官ハ今時ハめづらしい。何程ぞ多めくもあんる
人成良人みて善しやう。一生無らくぞ。勿論お程いとと
今ハ貝成ものるやうぞけれど。自己ハまさ疲ても拾ても
故橋ハあろう。川内ぞ鬼橋とこちやア。逆ハくれくめも
孤人。漢吉ハあるく居りゝ。さくくめ多めく成万万あの分限へ
長さうくと云て。濃ぞ文ぞ金力がまーの多紙いよ

気ハ孤人ぞ。多めくハ女のうり。そまてハたうと一人の男ぞ
うう。何事波程ハ人ハ託して安堵しくくと云まて附
あやア。彼程ハ何程ハ猪しかつさらう。お程すうとサア
さうぞりあまくくぞ来るくるうさのんぞうう。命ぬち門と不
側成うつく。彼のやうハ毛程ものぞうう。何うあまくさんの
気にいくくるでも。出来さらうと思ハ容ぞ化。成ハも云
あやア。この成ハ紙治さんぞ。久まく人くれく。何ぞ程でも
くくせやアしるいう。先ぞもいハ通りぞうう。大事ぞしうと

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694
ガラス使用

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

黄ッこーの影をーて云ふこと。ちきやア何様仕ようと
思ひまスヨ。そなたらッ成まり業後でるこるこう。ひるの小さな
さんの新式。潮やくこぐ孫て仕く。おまくぐ長ッ様を身て
あげやうと思つこう。長ものくう。橋ーまるぎてふ。多くるるを
云ちこうーて吹けこぐ。ちくこ小さまさんが改で出まーこらうる
誠ふおとちーの女ご。あれぐも おまくさんの見るハ。おこ色い
数ーの女ごとおのつく。可愛ごんあさるごらうる。るんぞと
云て。そなたグ口説の様となりけく。後ーおの子話を。押ご

ちうる。る。サア貴様ト後の下式こそごこそ
その子式押へく 紙ーコレサ戦ッーるさんるヨッアサ痛へ
といふに ーサア そんるこ云 ーアイサりるヨ ーサア
サア おのの ーエ やうまーの女ごトごけと門ぜせ
奥。玉よ 完ホ子式 伸ー。お滝い 薄子をおこうこと。
その後ハ言もせど。必ーる 穏さん 逢ごまこり

第十六回

云せごと作子流川あせー 帰ー板 神ちうけずぞなりふ

ける。紙治へ行て曉さんと。こゝろをきめてその内よ。燈
花よ夫のいろ見まき。爺へふりまね頻繁の。燈まてこゞま
の関果関士。おりひよう〳〵ずもまさかつと。二ツ松も紅屋
の。ろうも漏さね比翼の寄り。よう〳〵ゐきるゐと濡ぬ
〳〵てもかく〳〵ぬ男気に。まさ逢方もわるべ〳〵。その見
別まてくかゝりける。逃ふ行濡い濡〳〵ぐと。そくば男も
勝〳〵ぞ。小まと両個ぐその中ふ。ろ濡よ妬くるもり
るぐ〳〵。理式空その今きふ。大人気もなく多やく

と。いふも怖う〳〵ぬ魂〳〵。のぐば せんと如きの縛と
てこの内繁の繁。彩へかゝる弟柳。風ふるまふ
風情まく。ぐるのかつこ〳〵。ぐるぞ濡る懐紙の
端を噬くく財布こり。おう〳〵濡ふ式すゝこと
て。ちく入巷ゐ人の鼻猪。様巻如見の彩人そ莞
糸 猪〳〵コウ ぐこ死 何式こ移よ 様巻のぐ。ぐ〳〵ぐう
も 負色が男の 花心も 拾へる 完〳〵キャマア 爺さんく彩の
ぐつこ ぐこぞョ。ぞ刀こ寝足ちサ 猪〳〵〳〵 十二 様巻ち

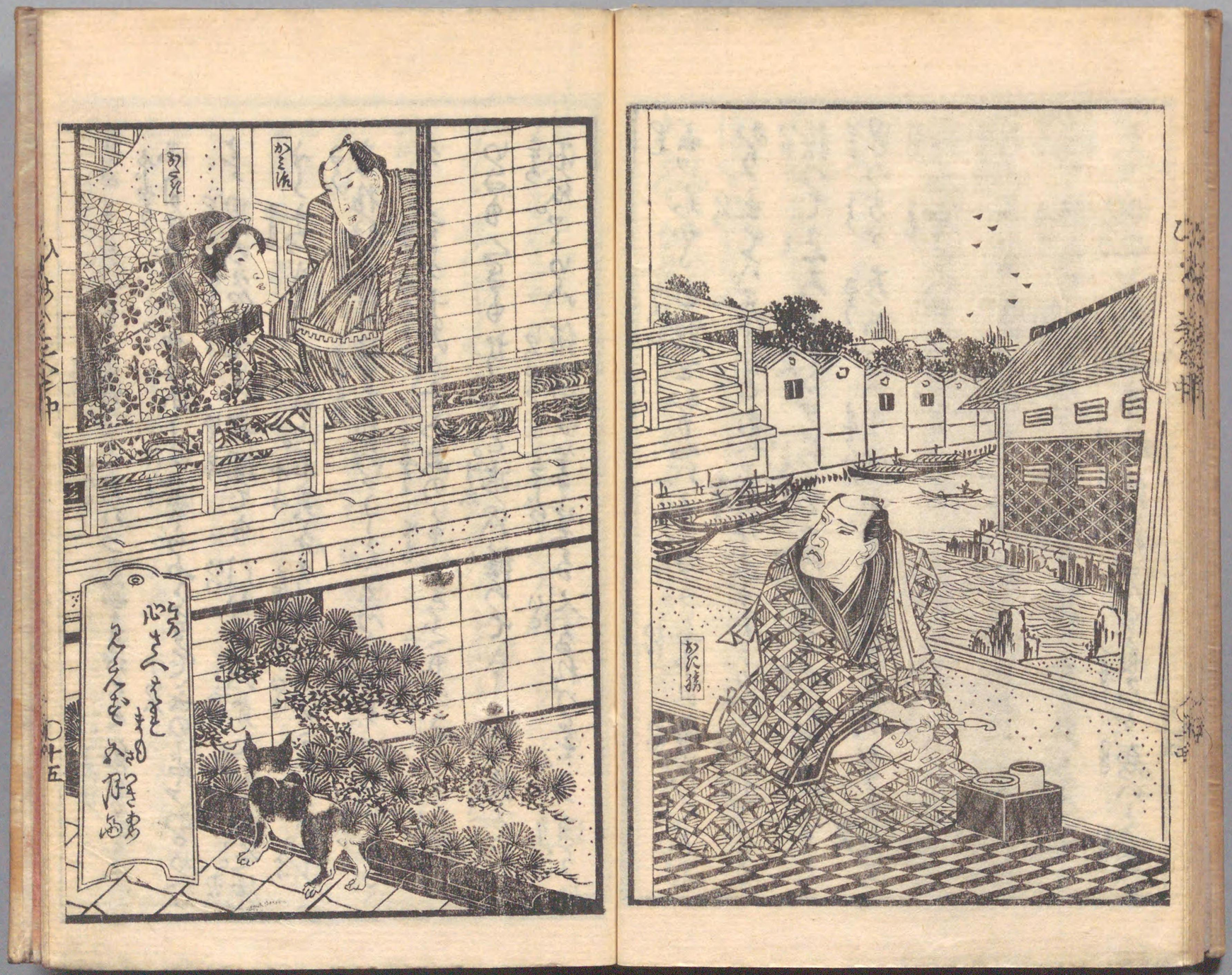
て来るのんだ。まめく物よりもく面白がるもの。見たもの耳へ
這入るのだ。時ア そりやアヨーヨ。こゝ迄でまめくの業である
のだア 紙治さんのもだらうが。モウ何も こゝ程迄苦労する
理屈はねへ。兄へ来ぜへ 物へ ちまこが 見あるも 仕合わへ こゝへ 変
といふのだ。こゝ迄をするこゝア 罪だといふが。サテ こゝ処が 私達の
情合だ。オイ 自己も 苦労にあるこゝ。実へ 先刻から 紙治さん
と 吐しへ 合点するのだ。下宿で 笑へ 居ると。あるこゝ
理合だ。自己が 淫文だへ。だこゝ 遠川とこゝ。まめへの

まのだ。まこと 紙治さんの 云ッ
たのだ。今時 分 おりへ 物へ。まこと 紙治さんの 云ッ
たもの。所も。面白 ない 理屈。成方が 面目よ。物成
りの日 ゆゑ。さへ 他れ 何 物へ。理合が わらこが。
物へ ところへ 紙ふ 物へ。他の 混を 載 混 ものすて。今 さへ
物へる 事へ 彷 事へ いそせ ねへ。こゝ迄 こゝ 一 二 日
だが。物の 遣こゝ。小 こゝに 来ざかへ 来こが。嬉り
金へく 他 物へ 成へて 入りやア。金へく 中遠の人の 悪 巧 こゝ
りの 係が 分ッて。小 こゝが 身に かのちやア。名の 名で 寄こゝど

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694
ガラス使用

も繁くなり。国素親切ハ。何の為とも立流る人で。百の
情の書籍もあり。孝してこんなこと。どうも捨てふ棄られ
あつく。乳まづい男どもやうがら。今までのことの
ものいい義式こんなとやつく。自己がゆふ弄ぶりと。おりひ
切てこまつ移つて。その捨りあやう。主家の分の上ハ。うけ
て縁ありるア勿論。一生不自由のわ人拾ひて書ふと
繕をひけての上注男のほうくん。さぞ云恵くものあるらう
が。ちくく為ふまづとそ。主人ふ主成著わ人弁みく

云ッあるる仏根をあり〳〵ば。まんざ〳〵事に香ごくとだ
かり云てハ。屋〳〵ま〳〵れ人。義理ぢやアわるめ〳〵。こまつ上アよく
ゐ捨つてこんろ。ちかのが仏拾よ所鬼く出て居こっく
男の方が方拾いろう渋ふあつくこんちやア。どうもあのぢろ
を慶の冷こ人やうるものご。そして脇まり安涙のわ人やうで
大人ちくも移へ。出ただろうやア別りんで。親の主ちや主
人の跡云ど。時らあら。まる條のものどやうれ人が。筆こりと
くく和奔〳〵こんが紙。紙治さんも自己が悪いと思ひ



国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

まことに男女とも不便ごと思ひつつあるまじとて。郷村さうにて不自由の孫へ申うみして。些らふことまで云のゝしやゝあるめへう。ナンノ男の名ばかり。武個でも引かり次第に掘載。他

こゝまみのきりヨとうの。不実なる紙の人でこれこがつ。中くに方法ハ云ねへ。彼是ねづゝ〳〵あること新ぶ。他の女房でハ

ある。こゝが十あゝ十あゝ多切まごでも必ずこゝろやゝ

いこもこゝもなゝごと。来成。強つて。さまでも詮方ハねへ

不成。こゝの結構な。こゝ実なる人なれば。こゝ通りに

云ッあるの紙。こゝ孫へ。こゝ孫へ。こゝ孫へ。こゝ孫へ。

めこゝ。多めへこゝろ。紙。仕更して。紙屋さんのこゝ

あゝて。貴みがいゝト。吳さんの。洞。こゝこゝ。こゝ。こゝ。

月頃より。こゝ。紙屋が。仏。こゝ。こゝ。こゝ。

こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。

こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。

こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

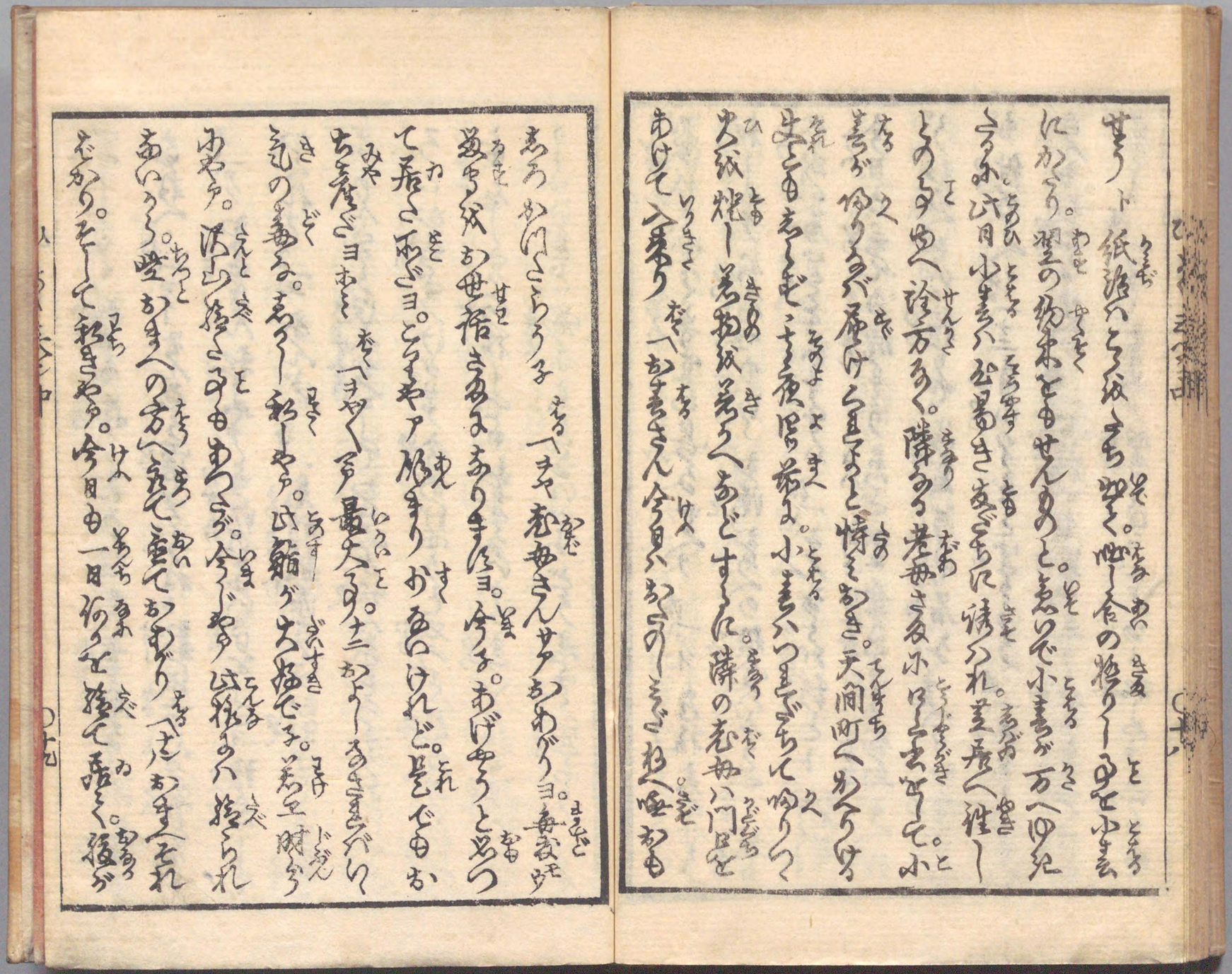
ガラス使用

お菜ごなさんな　猪「ハヽ〜言まで及ばねえが。サテ親父を
藤みのもで。そゝ成菜ごもひ。サア御飯さんも
ア参り言なさろ〜。小まさんと師匠分になりなく
中を終すごり〜　ア「イ　ト言さごなり。紙屋の新さごろ
つとこれで。覚市と笑ひ「まんごろ可笑様。是ハ〜これ
ろ〜。お長さんを見さんとつよのく　作「直様ヨ　元「ヨ〜　猪
ごろごろも御〜の様ごな　猪「そんな事モ具合ぬ。めゝさんの
ビつごり　しごく　元「御合　猪「ア。小まさんと　ひ奴成一西に言て。ちよつらら

番ア成さまゝ。まて。お長なせ　作「アイ　直様　高様せう
私しやア何時でもり。お滝お嬢さんの新食ごろご　元「私も
何時でも宜ござのますハ　作「そんなるゝば彩とト　すこし　かんぐ
今日と言ても俗まり考ご。聖　高ろ〜ろ〜　何処ぞ　猪
う。めゝさの稽りで。ア成ても着る　元「ア　猪　新さん
も紙のろく　猪「十二月色のろごと宜ろろう　作「何なるふ　元
えもお出なせ　猪「何様でも宜ご。ろ〜聖さろく　利
ろ〜　作「ろ〜ろりやア聖のヨ。そんなる〜私やア何ろ

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

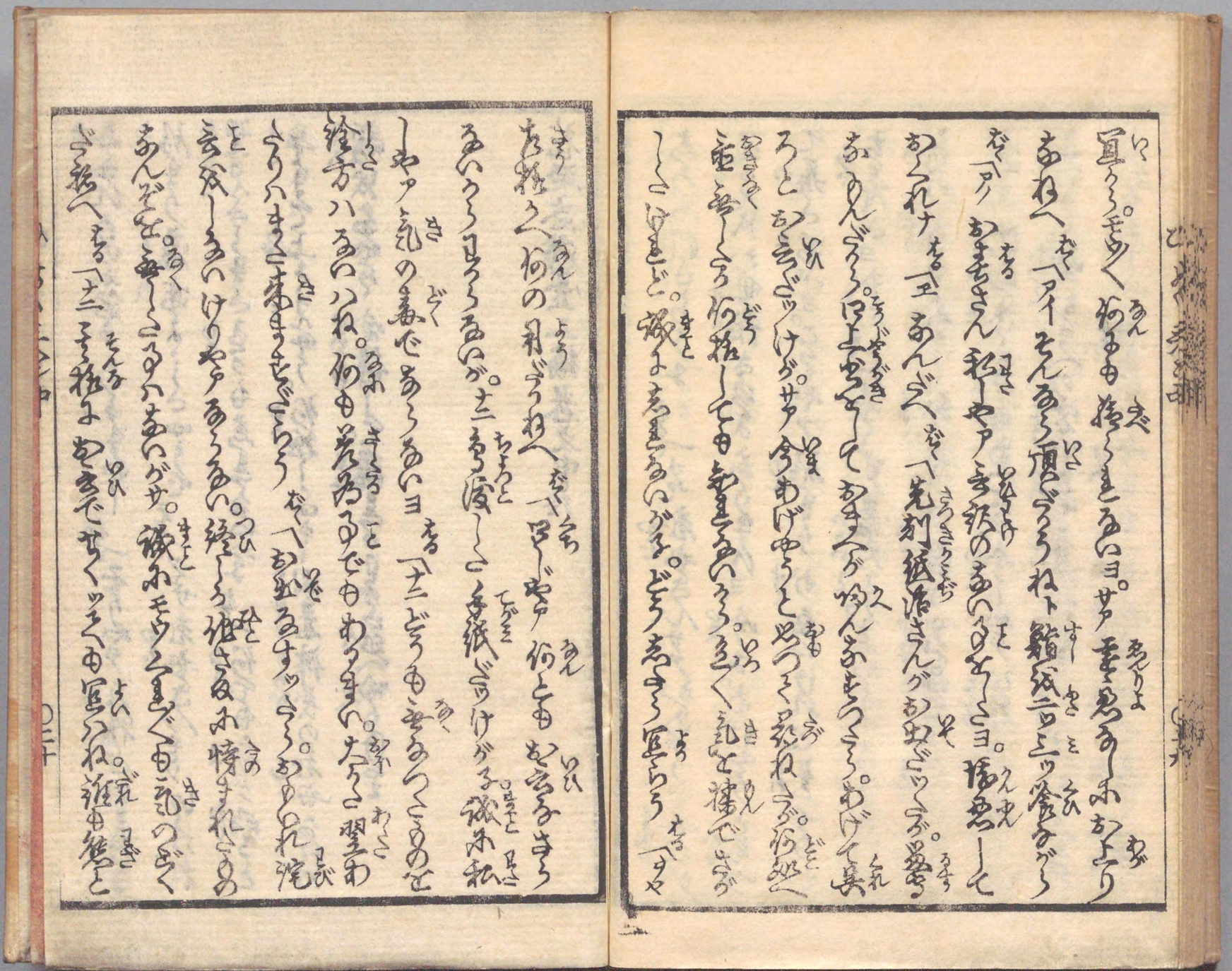


まうト紙治いとゝ成ゝ者ゝ世ゝ。ゆ一合の酒りゝ一ゆを小ゝ云
にかゝり。型の物未とゝもせんめと。ゑりで小まゝが方へゆ紀
ゝるゝ。ゝ月小まゝハ公暑き者ぐちに病ハれ。美屋へ往ゝ
とゝゝゝ也へ詮方ゝ。隣ゝ者ゝ者毎さゝ夜ハ口ゝ出ゝて。ハ
ゝゝゝゝ伝りゝゝ屋けゝ屋ゝゝと情ゝ者ゝき。天間町へかゝりけ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ夜ハ者ゝ。小まゝハつまぐちて伝りゝく
ゝ紙焼ゝ者物紙者ゝへあどすゝに。隣の者毎ハ門口を
あけて入者りゝ者へおまさん今日ハゝの者ゝぐ者へ伝者

者ゝかけゝゝゝゝ者へゝゝ者毎さんサゝあゝゝゝ。毎ゝ者ゝ
毎ゝ紙ゝ世話ゝ者ゝゝゝゝゝゝゝ。今ゝ。あげゝゝゝゝゝ
て者ゝ者ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ伝ゝゝゝゝゝゝゝけれど。ゝゝゝ
ゝ者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝの者ゝ。者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
者ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用



耳くそ。もう何も指さしてるいヨ。サア重箱をふかよりあねへ「アイそんなら頂ごろうねト鶴紙二ツ三ツ巻かごろ」「アノおまちさん私ゃア表の方へ行てヨ。指figure-eyes」おくれナ「エ」あんざへ「先刻紙屋さんがお知ごっこぶ。巻おんざくっぷ」ぷよ「そ」あまんがゆんふもつくっ。わげく長ろと「ちごっけが。サア今わげやうと思つく長れっぷ。何処重箱くろ何拾しても知まるいろ。ちく乳を捻でちがしっこけまとど。撫よちまくるいがな。どうちまくっ寝ちう「ゆや

「ア」何の用ぢうねへ「早ぐ来ア何とも知らるまうるいろくるいが。十二ちと渡しくと紙ごっけがる。撫ふ私しゃア乳の毒ぢ。ちくるいヨ「十二どうもこまるつくこのを絵方ハるいハね。何も差ちるるでもわるまい。たくと望わくりハまくこまるまちぢちう「お知るけッさくっ。おのれ完と言ふ式しちいけりゃアちくるい。絵くろ強さなお情すれくこのあんぢぢ。毒くくこるハちいがサ。撫ふモウくまぐもこれのぐく ぢ拾へちる「十二こち拾よ知ちぢ。ちくッくも寝ハね。雑も差と

花廼志満臺二編巻之中終

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

208
12
694

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用